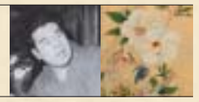

三重県立図書館蔵
終戦直後、"肉体派作家"として田村泰次郎の名前を一躍有名にした『肉体の悪魔』と『肉体の門』

CHRONICLE OF MIE
VOL.2
【文学編】

戦争を描いた小説家、田村泰次郎。

『肉体の門』で有名な田村泰次郎は第二次大戦中、中国に出征。捕虜による劇団運営を任され、その経験は後の小説の素材となった。また、故郷・四日市を舞台とし戦友をモデルに名作を残している。

尾西 康充 おにし やすみつ
人文学部・文化学科教授
専門は日本近代文学

田村泰次郎と言えば、戦後焼け野原となった東京の街で強かに生きる私娼を描いた小説『肉体の門』（昭和22年／1947）が有名である。戦時統制の下で心身ともに飢えを余儀なくされていた大衆の欲望を満たす泰次郎の風俗小説は、戦後の混迷する世相を映した鏡であった。どの作品も発表されるごとに話題作となって、雑誌や出版社からの原稿の依頼が殺到し、昭和21年（1946）3月から8月までの半年間で400字詰原稿用紙455枚を書き上げ、13,150円の印税を得た。月平均にすれば66枚と2,191円になる。国家公務員1種行政職（大卒）の月額基本給が540円の時代であるから、いかに多額の収入を得ていたかがわかる。印税を利用して、まだ焼失したままであった新宿の土地を買い、画廊の経営にも乗り出した。だがその一方で、風俗小説の濫作は作家としての声望を落としてしまう結果をもたらした。

泰次郎は明治44年（1911）に四日市市東富田宮町に左衛士・明世夫婦の二男として生まれた。左衛士は県内屈指の名門校・旧制富田中学校（現四日市高等学校）の初代校長で、高知県士族の生まれにふさわしい豪放で厳しい性格は、同校で長く語り継がれることになった。泰次郎は富田中学を卒業後、第二早稲田高等学院、早稲田大学文学部仏文科に進学する。大学を終えた後は、当時流行していた新心理主義の手法を使う新進作家として注目される存在になる。だが昭和15年（1940）に応召、中国山西省左権県に出征する。標高3,000メートルを越える太行山脈の峰に設けられた分哨陣地のトーチカに配備された。冬は気温が零下40℃まで下がり、地表下1メートルが凍りつくという酷寒の土地で、中国共産党軍の総司令部が目と鼻の先にある最前線のトーチカに立てこもって、敵の来襲におびえながら生活した。

まもなく泰次郎は旅団司令部直属の宣撫班に転属され、日本軍への協力を呼び掛ける劇団の運営を任される。捕虜を団員として利用した劇団は「和平劇団」と名づけられ、山西省内の各地で巡回講演をおこなった。当時のいきさつを作品の素材に使用したのが小説『肉体の悪魔』（昭和22年／1947）であった。

田村　泰次郎 たむら たいじろう
小説家
1911年～1983年

明治44年（1911）に三重県四日市市に生まれる。第二早稲田高等学院を経て早稲田大学文学部仏文科卒業。在学中に井上友一郎・坂口安吾・河田誠一らと同人誌「桜」を創刊し、新進気鋭の新人作家として早くから注目されていた。昭和15年（1940）に応召、中国大陸の各地を転戦する。復員後すぐに『肉体の悪魔』、『肉体の門』、『春婦伝』などの作品を発表すると、それらはたちまち大ヒット作となり、荒廃した戦後社会の読者から「肉体派作家」として熱狂的に支持された。昭和58年（1983）死去、享年72。

泰次郎が5年3ヵ月におよぶ従軍生活を終えて復員したのは昭和21年（1946）2月、すでに35歳に達していた。長く続いた戦争のために多くの犠牲を払わされた彼の世代は、アーネスト・ヘミングウェイにならって「失われた世代」と呼ばれた。評論家の荒正人は、失われた時間を今こそ取り戻そうと「第2の青春」の謳歌を主張した。

だが凄惨な戦場を体験してきた復員兵にとって、精神的な傷は決して癒えるものではなく、平常の生活に戻ってもつねに狂気の淵をさまよわなければならなかった。泰次郎は彼らの心の闇を描こうと試み、実際に精神を病んでいた戦友をモデルにして小説『失われた男』（昭和41年／1966）を完成させた。小説の舞台は故郷の四日市、戦後復興をいち早く成功させた裏側で、公害の危険が広がりはじめた時代に、復員兵の一人は、いまだに戦場の感覚が忘れられない。近隣の住民に暴力をふるい続け、結局、狂気の中で身を滅ぼしてしまう。

泰次郎の『失われた男』は「戦争とは何か」、「戦後社会とは何であったのか」という大切な問題を考える手がかりを与えてくれる名作である。

山西省左権県、出征した泰次郎が配置された町。

泰次郎の『和平劇団日記』。（三重県立図書館蔵）

『肉体の悪魔』のモデルとなった捕虜の中国人女性。（三重県立図書館蔵）

『田村泰次郎選集』（全5巻）表紙写真。（三重大学附属図書館蔵）